

雄略紀 497P
凡に 471P
万 2-467 383P
2-384 何れ

1544-3/5 同文
HL

1570-1/2
1544-3/5
1587P
地名 242 江口
190 大阪府 河内
中元 島田 西村 南天

第二十三章 住吉の客人

一方そのころ、魏国からやってきた梯儼らの爲の新館へ外国使臣のための宿泊施設が、宇土半島基部北岸の住吉(墨吉)という所に造られつつあり、完工間近となっていた。参考次に述べると、推古紀十六年条に、この記述を述べている。
四月に、小野臣妹子、大唐より至る。妹子臣に、大唐の使人裴世清・下客十二人、妹子臣に、筑紫に至る。難波吉士雄成を遣し、

（事実上隋）

て、大唐の客裴世清等を召す。唐の客の爲に更新しき館を難波の高麗館の上に造る。

六月十五日に、客等、難波津に泊れり。是日の夜、飾船三十艘を以て、客等を江口に、大阪中島田に迎へて、新しき館に安置し、是に、中臣宮地連島摩呂・大河内直糠手・船史王平を以て掌客とす。八月三日に、唐の客、京に入る。云々とある。

＊

第12回参照

みと
御座 ①518' 5万令1地図
①519' - 1/3

改行

1.585^P - 2/2

観支線49^P
因 ①512^P - 2/2

木
呆れ ①21^P

①44^P

と、のみた。それは、荒涼とした景色であつた。

梯傷は、倭の地が海中洲島の上に絶在し、

或は絶え或は連なり、行けども行けども果てしなく、荒磯ばかりが打ち続くこ

とに、ただた驚き呆れた。聞きは、邪馬台国までは、周旋五千餘里(約

一五〇里)可りあるという。魏志倭人伝には、

倭の地を参問するに、海中洲島の上に絶在し、或は絶え或は連なり、周旋五千餘里可

りなりと記されてゐる。たぶん、この時の航海の様

子か述べられてゐるのであろう。とはいえ、何処から何処までの距離を一周

旋五千餘里と言つてゐるのか、定かでない。もしかしたら倭人達は

福岡県系島郡から、船でぐるりと廻つて、天草下島北西端の富

凡±399°

H10.5.22 CURVIMETER 7-并測(た)
①1512° ②1474° ③230,000m ④25,1200
230,000m / 30m = 7,666里

1.586° - 1/2

凡

凡

凡(邪馬台國)の西端に位置してゐたの
うに、至る距離約二三〇里を、ごく大雑
把に、五、五千餘里と稱してゐた
のかも知れない。(第265図参照)
なお、肥前国風土記に松浦郡直嘉の郷条に
「景行天皇が、志式嶋の行宮(平戸島の南
端地)から西の海を御覧になると、海の中に
嶋があつて、たくさんの煙が立ち昇つてゐた
大近という二つの島をはりめとする八十餘の
島々からなつてゐた」と記されてゐる。
このあたりの海は、景行天皇の頃から倭
の奴国(南の奴国)と九州北岸の地域とを結
ぶ大切な航路となつてゐたのではなからうか。

凡763



⑤ 1587^p 土 云 889^p
入江の舟 土かい 云 西海 854^p 指す月土す

Downloaded from <http://ajphaphapublications.org/> on 01/01/2017

この日の入江（有明海）の口、つまり「江」
口に、飾り船三十艘が客人達を出迎えた。
（推古紀十六年六月十五日条参照）
へこの入江の奥の方に、邪馬台国の都は有
るのか？
梯儼は、ようやく邪馬台国へたどり着いた。
左手に海中から聳え立つ秀麗な雲仙岳、
右手に低い山々の連なる宇土島があった。
・尚、宇土半島は、昔は島であつたろうといわれて
いる。（熊本県の伝説「角川書店、九〇頁参照」）
そして真正面には、「一ノ岳」（現在の金峰山）
名は、中世、吉野の金峰山にちなんで
名付けられたものという。「二ノ岳」「三ノ岳」と並らば、熊ノ岳の山々が、その美しい姿を内海（有明海）の水面に映していた。
救もなく、まるで鏡のようにおだやかな有明の海を、隊列を組んだ船団が、赤白青など色とりどりの旗や幟をなびかせ、華やかに賑しく進んでいった。
群なす飛魚が一斉に海面上へ飛び上り

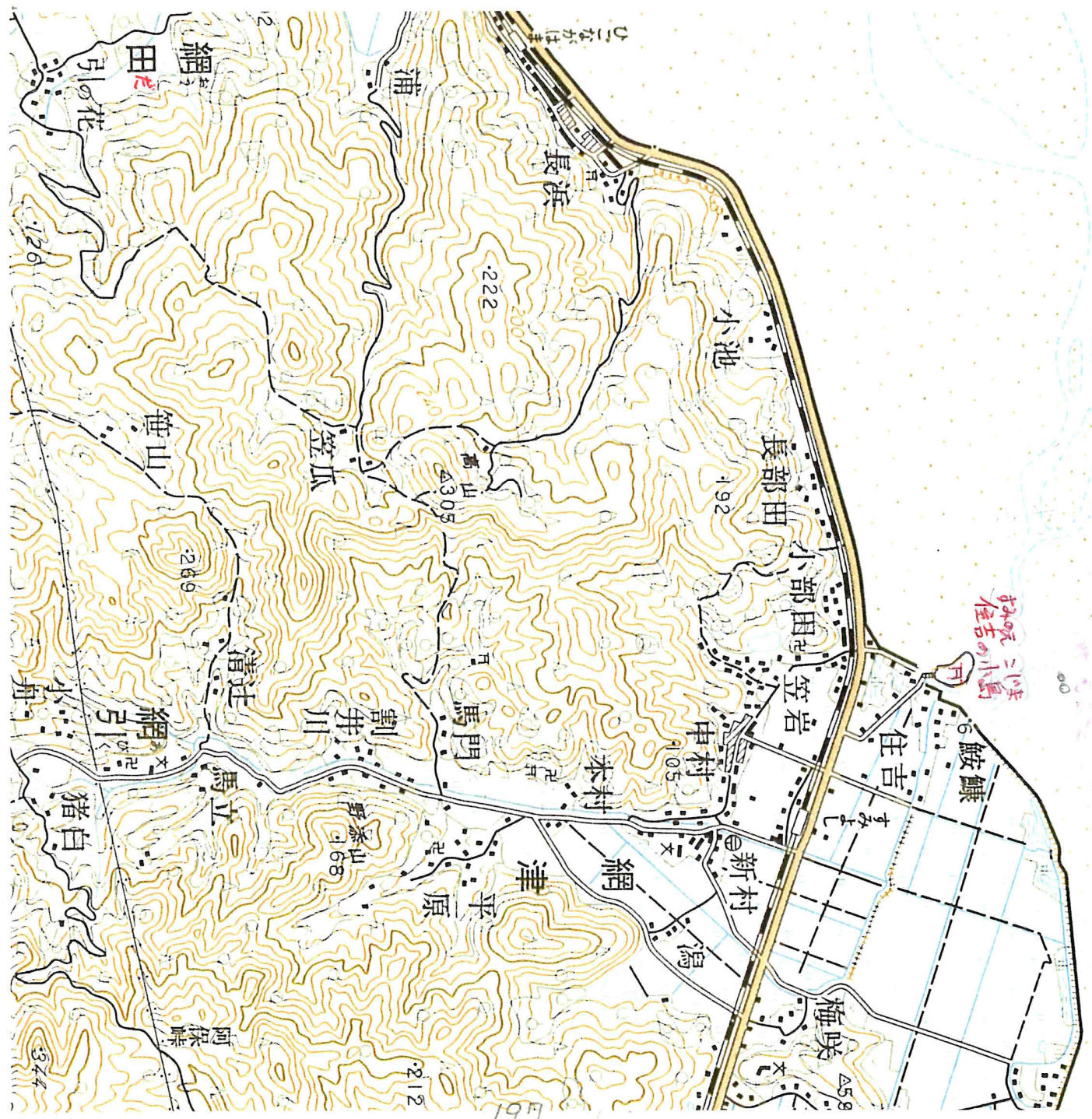
都村所
觀志緯 $40^{\circ} 80'$

の
時を待った。
梯子は、身も心も引き締まる思いで、着岸

[正]・カラー
 ・前頁朱記のよう修正 (7下さ"・
 ・1頁全面に、はみ出17大さく掲載下さ"・

197^p

34.1116 61.013



左頁 上半分に掲載下さい。

1588^p - 4/5



140G 写真図版 244 ^{すみえ} ^{こい} ^ま 住吉の小島

↔ ④ 1588^p 7 行

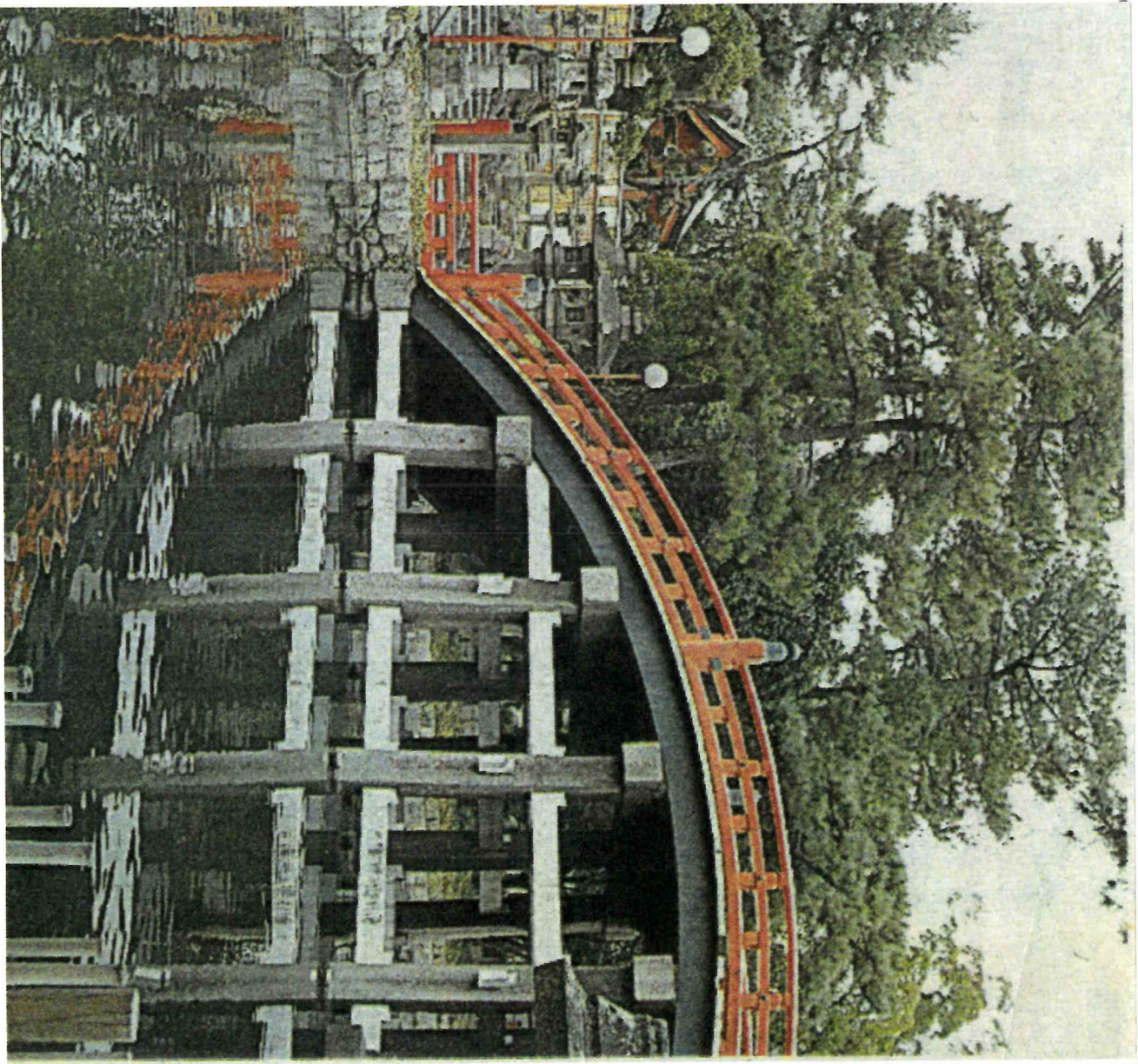
130G

『新宇土市史』第一巻、宇土市、平成15年3月31日発行、142頁参照。

- ・カラー
- ・上部は、適宜カットして下さい。(左へ下るはカットしない)
- ・右側上部分に掲載下さい。

↑

適宜カットして下さい



1588⁸ - 5/5

199

14aG 写真図版 245 摂津住吉大社の太鼓橋

13aG 朝日新聞 平成21年3月13日付 <住吉大社> 古代は海岸 遣唐使船も参照
 12a 1. いまの境内は海岸線から遠く隔た71136 古代はここが水際で
 9a 遣唐使船が沈着した

1.589¹/₂

中央の縦線を目立たなくして下さい。 山城宇治橋 4803¹/₂

左頁上半分に掲載下さい。

中央の縦線が、不自然でないようにして下さい。

長持人末
渡部
榎水多志
畑欽
新塚新茶
引白
一丘

山城宇治橋



絵巻子 1593¹/₅

13QG

14QG 第274図 山城国^{やましろ}の宇治橋^{ういばし} (山水奇観)

『日本各所風俗図会』16 諸国の巻Ⅰ、角川書店、昭和7年12月30日発行、47頁参照、
13 29 ちやうだい たに ばし 200
長大な太鼓橋だったのだらう。

波打際 1670

1.589^P - 3/2 引天地言 1994^P
厚子 2025^P

62161°
 越後無量
 蓮華山
 大君の命がこみ云々404°
 紀上497°
 紀上280° 命

魏^ミ帝^{テイ}の命^{メイ}をから^{カラ}こみ^{コミ}はるばる大海原^{オホウミハラ}を渡^{ワタ}
り^リいまその目的^{モクテキ}の地^チに蓬萊山^{トニヤノクニ}（雄略紀二
十二年条）に着^ツこうとてゐるのである。
梯儻^{テイトウ}は、感^{カン}に堪^タえな^ナい面持ちで、邪馬台国^{ヤマトノクニ}
の有様^{アリサマ}を見つめていた。
~~そして~~ここ数日間打ち続く荒磯^{アラシ}ばかりを
見てきた梯儻は、眼前^{ガンゼン}に広がるゆたかりとした
平原を目にして、よい神秘的な思いをつ
のうせりのだった。
へ東海^{とうかい}のさいはての、このような美しい別^{べつ}
天地^{てんち}に、邪馬台国の都^{みやこ}はあるのか。不老不死^{ふろうふし}
の神仙^{せんぜん}たちが住むという日蓬萊山^{くニヤノクニ}とは、こ
んなにも震おしい所^{ところ}だったのか。
そんな感慨^{かんがい}にひたしてゐる梯儻を乗せた船^{ふね}
は、大きな弧を描き、―――
佐吉^{さきち}の小島^{こじま}（いま佐吉神社がある）を廻り込んで
難波^{なにわ}の浪速^{なみはや}の入江^{いりえ}に相当する入江^{いりえ}に入っ
た。（大阪府の歴史、藤本篤、山川出版社）
二七頁参照）の水際^{みづぎわ}
なお、この入江は、佐吉あたりから始まつ

1916

和封字號
COP

コクヨ ケー-20 20×20

1589 419 1491 2の腕 1700 肩と肘との内 4011 1.590-2/2 船あり 元来 488 632 まき 516P

存ぞくいますす、
 小は小は難な升しやう米めい殿との、御出迎おでむかえ嬉うれしく
 支さえた。
 りようとしている梯てい偶ぐの二の腕うでをしっかりと
 つかつかと歩み寄った難な升しやう米めいは、船から降お
 とろろ恙さへ無く、お元氣げんきそう、何なによりです。
 岸き辺へには、難な升しやう米めいの姿すがたもあった。
 梯てい偶ぐはついに、女王国じやうこくへと至いたったのだった。
 左ひだりに、
 梯てい偶ぐはついに、梯てい偶ぐらの乗のった船ふねは、嬉き々きと
 た喚かん声せいが渦うず巻まく中なかつに分わけ入いって止とまり、黒山くうやまの
 ような人ひとだかりに取とり囲かこまれ、ままった。
 邪馬台国やまたいこく
 船ふねが着つくぞ。
 左ひだりに、倭国やまとをあげたの歓迎かんげいであつた。
 倭やまと様さまであううな。お顔かおをほころばせて、こち
 らを御覧ごらんになつておら小こる。
 隣りんりに坐すわつておいでのお方かたか、梯てい

大入 ひときり 一層 感嘆すをいである

⑤ 1592^末 丁酉 元 1517^末 小気味 771^末 1,591^{-1/2} 戦後、天皇の御市のとき沿道の者は旗を振って歓迎した。
 多く ⑥ 1601^{-1/2} 戦後 元 319^末 抑 12 元 300, 302^P

や か な 衛 兵 達 か 威 厳 を も っ て 直 立 不 動 の 姿 勢 	ま た 、 予 や 、 楯 や 、 弓 矢 等 を 持 っ た さ ら び 	た 。 	列 を な し 、 丁 重 な 礼 を 尽 く し て 出 迎 え て い 	行 く 道 の 両 側 に は 、 夥 しい 延 臣 厚 が 	肌 に 心 地 よ か つ た 。 	ト サ ク サ ク と 小 気 味 よ い 音 を 立 て 、 涼 風 は 	館 へ と 続 く 道 は 、 塵 一 つ な く 掃 き 清 め ら れ 	鳥 の 頂 の 館 へ と 向 う た 。 	続 く 中 を 、 賓 客 梯 儼 は 導 び か れ て 、 住 吉 の 小 	の だ つ た 。 	出 迎 え の 者 達 は 、 口 々 に 梯 儼 の 労 を 犒 う 	入 り ま す 。 	ら の 遠 路 を お し て の 遥 か な 御 下 向 、 誠 に 痛 み 	申 し 上 げ て お り ま し た 。 こ の 度 は 、 帶 方 郡 か 	同 、 今 日 か 明 日 か と 、 お い 分 お 待 ち 	貴 方 様 方 が お い で に な る 日 を 、 私 達 倭 人 一 	こ こ に 、 大 夫 大 伴 武 以 連 が 言 っ た 。
--	---	------------	---	--	---	---	---	---	--	---------------------------	--	---------------------------	--	--	--	---	--

警備員に配された兵

元 1462
元 973

H30(2018)4.8(回)~4.10(4回)
令和2(2020)1.7(土)~1.12(5回)

EV 1,591^P - 2/2

小林 竹 728
小林 信 739
吳漢 子 2261
田中 1573
百科 ③-42

13. 1. 村 魏文建 44⁰
311 366⁰

カカ⁷
 1121^P
 木 漢^{ボク}
 吳^ウモウ
 木 劍^{ボクケン}
 424^P
 攀^{ハン}
 南^{ナン}
 するこ
 カカ⁷
 166^P
 吳^ウ漢^{ハン}
 キウ^{キウ}

を
保
ち、
橋
の
た
も
と
を
固
め
て
い
た。

倭人達加手にてゐる木弓は、下加短く、

上が長く、
魏国の弓とはずいぶん

「たものであつた。」
(「魏志倭人伝」参照)

＊なお、魏志倭人伝に記されて我が国の往古の事

は、現代の弓へと引き継がれていき、と言います。

得ようか。当代の弓もまた、
拵左手で握る

ところから短く、上は長いのである。

新設漢和辭典
小林信明
小學校
昭和四十二年三月發行
附
參

よく見ると、竹筴(竹の矢)には、鐵の鏝

取り付けられていたか、
骨の髄まで取

リ付けられていた。
魏志倭人伝

痛 照

鉄は、もうこの当時、盛んに使用されてハ

たのた
た
た

鏡夫人位
山
ト
こ
う
記
さ
水
て
い
る

兵には矛・権、木弓を用う。木弓は下を

短く上を長くし、竹筴は或は鉄鋸、或は骨鋸

	た
	り
	L

*なお、中国では、長い毛を使用する民族を、女と弓の二字を合わせ「夷」と呼んだという。(もとも「夷狄」「夷蛮」という場合の夷は東を意味する)

重仁記
地をとりて金273
主 紀上199 55 祓祀

幾首か 改行
401 13行 402 10下

52-215
52-167
401 2 13行 402 10下

1,592 1/8
400 9

52-217
52-215
3

52-143
天つき
25行

① 白波の千重に來寄する住吉の岸の黄土にほひて行かな
白波が千重に打ち寄せて来る住吉の岸の黄土で、美しい色に染まて行こう。(天つき 25行)
六九三二

住吉の岸の黄土	万葉集には、曰住吉をうたひ込んだ歌が数	多く掲載されてゐる。	大倭国(肥後国)の曰住吉をうたつたと考	えておかしくないものを幾つか抜粋してみよう。	② 馬の歩み押さへ止めよ住吉の岸の黄土に	ほひて行かむ	馬の歩みを押さえて止めなさい。住吉の岸	の黄土に衣を染めて行きましよう。(万六	③ あつらひき人を吾家に住吉の岸の黄土を見むよしもが	あつらひき人を吾家に住吉の岸の黄土を見ようとして、いつ我が家に立ち寄	て下さるかしら。(万七一四六)	④ 駒並めて今日わが見つる住吉の岸の黄土を	萬代に見む	駒を並べて今日見たこの住吉の岸の黄土を	萬代までも見たいものだ。(万七一四	ハ)	⑤ 住吉の名兒の決込に馬たてて玉拾ひく常	忘らえず	名兒の決込は、今の長承のことであらうか。	住吉の名兒の決込に馬をとめて珠を拾った	ことがいつも忘れられない。(万七一
---------	---------------------	------------	---------------------	------------------------	----------------------	--------	---------------------	---------------------	----------------------------	------------------------------------	-----------------	-----------------------	-------	---------------------	-------------------	----	----------------------	------	----------------------	---------------------	-------------------

万3-231
朝日新聞

住吉大社
津

小林 568P
路陽ガラン記 263P
津(わたしば)船つり場

592P-3/8
4010

万3-215P

はたおり
機織 1789P
裁縫 66P

万2-239P
4

〔五三〕
住吉の波豆麻の君が馬乗衣さひづらふ漢女
をすゑて縫へる衣ぞ
住吉の波止場の君の馬乗りの衣。さっぱり意味
の分らない外国語をしゃべる機織・裁縫が
巧みな漢人の女を置いて縫った衣です。(万
七一 一二七三)
⑦ 住吉の津守網引の浮子の緒の浮れか行かむ
恋ひつつあらずは
住吉の津の番人がする網引の浮の緒のよう
にただよって行こうか。恋に苦しんでいず
止場)の番人のことを指しているのである
⑧ 白細砂三津の黄土の色に出でていはなくめ
みそめか恋ひらくは
私か恋しているとは、表立って言わない
島基部の住吉の山手に網引町がある。(第四巻参照)
津(わたしば)船つり場の神主、津守氏には切り離して考えたい

H17.11.28付 園田主人からの手紙に、「土木屋」とある。

$$1.592^p - 4/8$$

M24(2012)8.17.宇土市史資料館あたりに5人(女性)に確認は
新宇土市史第2巻93P.254(新井川)は地名だろうです)
5万分の1地図 (ニト)

①かー、宇土半島基部北岸の海浜沿いの一帯
（すみよし）
了る住吉駅近傍）では、黒い↑↑↑表土を三〇
センチ程掘ると、黄色っぽいパラパラした土が見られる。
●穴を掘って積み上げた土は、赤味を帯びていた。
■また、住吉あたりの海辺から、
南の山手へ行けば、
現在もあちこちに黄土色へ明るいオレンジ色の
の土を目にする。ことか出来る。（写真図版246参照）
なお、宇土半島基部を北流して住吉に注ぎ込む
網津川の中流域で馬門あたりには、馬門石（ピン
馬門）あたりを経て流れ下る。
（宇土半島基部北岸）
「凝灰岩」の産地として知られている。（第273図）
網津川は、雨が降って増水すると、赤味を
帯びた綺麗なオレンジ色に変わる。
という。宇土市網田（住吉のすぐ西の方）出
身の園田和美さん談。「新宇土市史」第二巻
網津川の上流域部において地元土木業者が採取し
た黄土色の土を、園田和美さんが送ってくれた。（写真
図版247）乾いた黄土と、へ水を含んだ黄土
（参照）

宇土市、平戎十四年三月二十九日発行、九三頁、二五四頁。他参照、

コクヨ ケー20 20×20

⑦ 1588¹ - $\frac{2}{5}$
209^P

参照

⑤ 1588^P - 3/5

11

人 - う開いた

カラー

2/0

1592 P-5/8

1364

1464



写真図版 246 網引町の棚田

(住吉の南約3km)

1364

『新宇土市史』第二巻、宇土市、平成15年3月31日発行、口絵参照。

・ヤ赤っぽい色の土が散見される。

※ コーデすると、どうして赤味が濃くなります。土の赤色を押し、黄色を少し加えて下さい。

2/0

1592^P-6/8

△ 間隔をせめて下さい。
← 15ミリ移動

・ 左頁の上半分、
はみ出して大きく
掲載下さい。

・ 上、下は、適宜
カットしてください。



↑ これ以上、赤くならないように
下さい。

12 ①: ^{かんきつ}乾燥状態
GG

12 ②: ^{アクリル}水を含むと赤色に変わる。
GG

14GG 写真図版 247 宇土半島基部北岸、住吉の黄土
12 平成18年(2006)2月9日、宇土市網田出身の園田和美さんから入手。
GG 写真館にて撮影。

令和元(2019)6.7(金)へ

1,592P-7/8

F4/8
6/1

(*)

一方、大阪の住吉あたりの土について、こ
う述べられてゐる。
「万葉研究家の金子晋著『よみがえった古
代の色』によると、金子晋氏は、一九七八年
(昭和五十三年)に大阪市阿倍野区の阿倍野神
社付近の傾斜地で、万葉集にちなむ黄土層を
発見した。
だが起る、いかな、今や全く市街地化した当
地付近では、黄土などどこに探りようもな
い。
という。『朝日新聞』平成十二年十一月一
日付へ難波万葉スケッチ。『よみがえった
古代の色』金子晋、学生社、二一―二四頁参照。
往古の人々は、住吉の岸の黄土に多大
の愛着を抱いていたように見受けられるが、
歌ったものなのか。今後の考察を待ちたい。

1,592^P - 8/8 版 1588^{1/5} 9/9 著者 1462^P

1588^{2/4}

魏館

527

1811

312

岸川から、少々離れて浮ぶ小島までの間に

掛けわたされた橋、数橋とも呼ばれる「反橋」

を、梯儼らはゆっくりと渡っていった。

橋の下には、清らかな有明の海が、まん

まんと満ちていた。

*参考迄に述べると、最初この地を訪れた時

には、やや長大な橋がかかっていたが、

今は、橋の基礎だけが残っている。

*なお、

往古の住吉の島は、南端部が「あなり」字

土半島の北岸、海にあって、その当時の橋

の長さはもう少し短かったのかも知れない。

い、☒ えてみた。可能性もある。

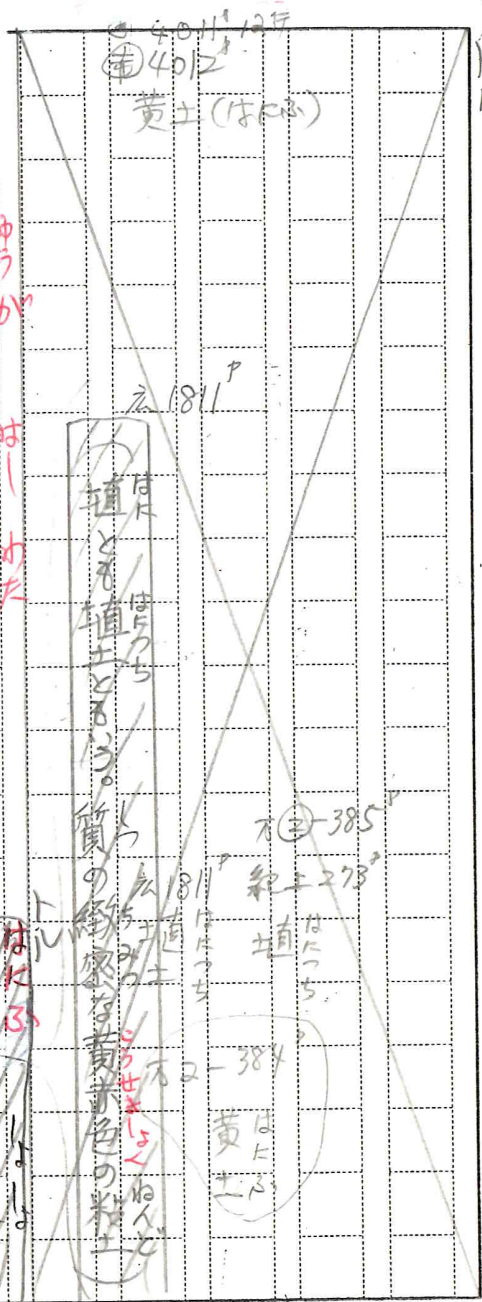
と思われ、全く定かならないことであ

る。

2133-3/5 船王神・猿田彦志神 基礎 533P

1593-1/5
546/2P-1320P

その優雅な橋を渡りきって、
見られる坂道を右に折れ、左に折れて小島
の頂の広場へ出ると正面に、
千木をそより立たせた荘厳な魏館があった。
(宇土郡網津村大字笠岩「佐吉神社」の社殿
参照)
吉大在し西本泰、学生社、一八頁へ太鼓橋。
反橋へ参照
「さあ、どうぞこちらへお上がりになって
下さい」
難升米はこう言いながら、梯橋らを館の内
へと案内した。
導かぬままに、中央の御階を昇ると、小
きい石段があられた。広間があった。
その時、御階の下に伊支馬ら四人の男達が
やってきたのを見て、難升米は手招きしなが



H30(2018)4.8(日)~4.10(4日)

IF

1.593^P-²/₅

伊支馬 40'2⁵ 伊支馬 1544^P-5/5

らこう言ったで

「ここへまいらぬよ」

客人

伊支馬達は、梯候らの前に正座して丁寧に

挨拶した。外^と国からの賓客

ここに難升米は、客人達にこう紹介した。

「この者達が、これから後、皆様方にお仕

え致します。どうぞ向なりと、お気軽にお申

しつけ下さい。伊支馬の次を彌馬升と曰い、

次を彌馬獲支と曰い、次を奴佳親と曰いま

す

「こうして梯候らは、この真新一い魏館に落

ち着くことになった。

*

427 OK H10.5.21(6)

当該 1561^P
個所 407^P

1546^{P-3/4}
1593^{P-3/5}

紀上 120^P
2483

伊支馬 1546^{P-3/4}

伊支馬・彌馬升・彌馬獲支・奴佳靱

魏志倭人伝には、

官に伊支馬有り、次を彌馬升と曰い、次

を彌馬獲支と曰い、次を奴佳靱と曰う

と記されてゐる。

これはこゝらの者達についてはどう考え

たらよいのだろうか。以下、思うところを述

べてみたい。

先に、

伊支馬とは、――神代紀上第七段、一

書第三に見える。活目津彦根命のことであ

らう。

と述べた。(第二十三章伊支馬の項において既述)

神代紀上第七段、一書第三の当該

個所を引き写してみよう。こう記されてい

る。

素戔鳴尊、其の左の髻に纏かせる百

白箇の統の瓊の綸を解き、瓊響も瑤瑤に、天

渟名井に濯ぎ浮く。其の瓊の端を嚙みて、左

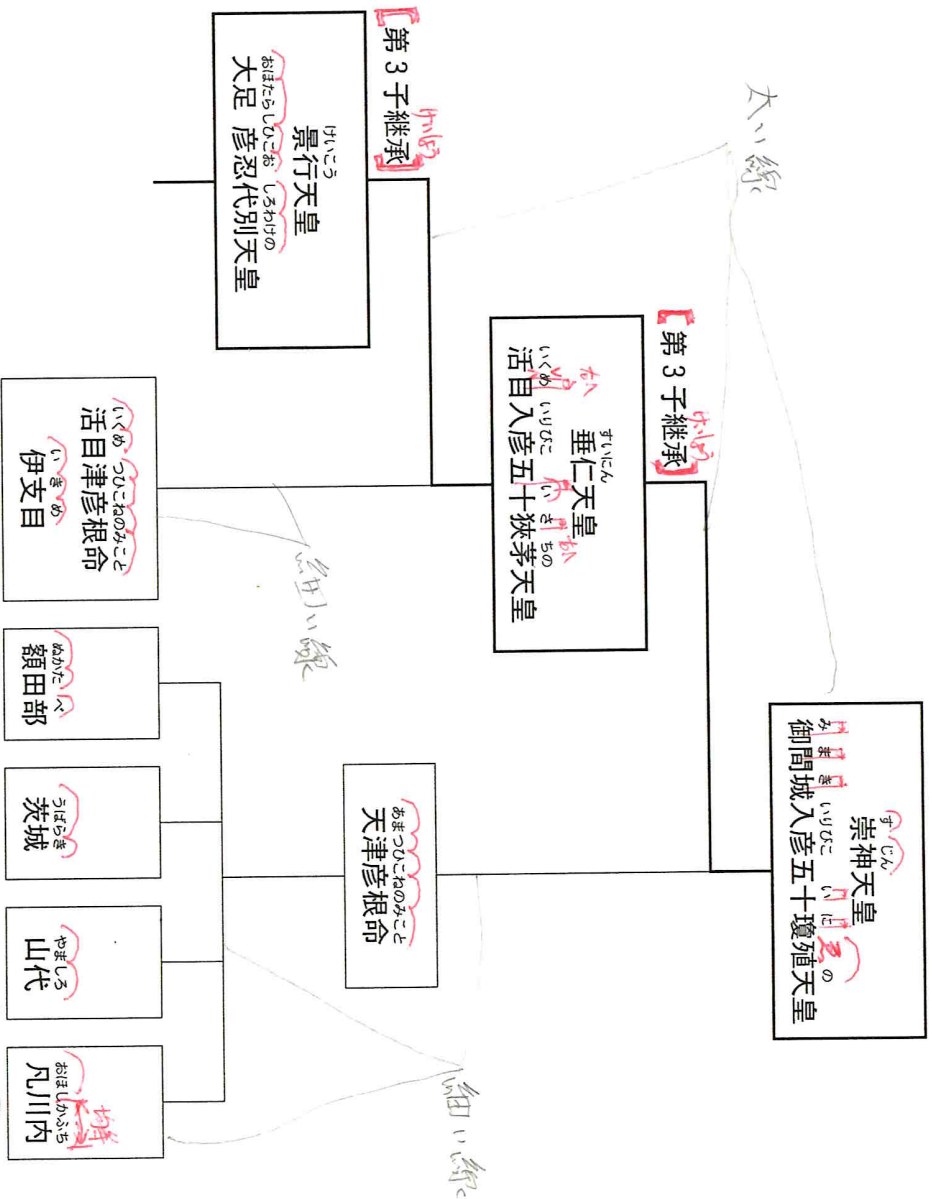
「ニニ」前頁! 仲文の表に示してはない
 1.593-4/5 行上106 大明神=480和
 太いゴ4 行上120 42770K H10.5.21

の掌に置き、生す兒を、正哉吾勝勝速日天
 忍徳根尊。復右の瓊を噛みて、右の掌に置き
 て、生す兒を、天徳日命。此出雲臣・武蔵
 造・土師連等が遠祖なり。次に天津彦根命。
 此茨城國造・額田部連等が遠祖なり。次に活
 目津彦根命。云々
 又また、神代紀上第六段本文中には、
 様ながら、少違っており、
 「素戔鳴尊、正哉吾勝勝速日天忍徳耳
 尊と曰す。次に天徳日命。次に天津彦
 根命。是凡川内直山代直等が祖なり。次に
 活津彦根命。云々」
 とある。
 又たぶん、日統の瓊は、高貴な血筋を引く
 皇族であることを示しているであろう。
 又そこで、天津彦根命も、活目津彦根命も、
 天皇（崇神天皇）成務天皇のうちのどの天皇
 かは不明の長子系をたどった子孫なの
 ろう、と考えてみたい。第29表崇神・垂仁天皇の
 子孫の系譜を参照

・文字は全てゴチ。

中へふりわけ
1526 年

第29 表 崇神・垂仁天皇の子孫の系譜 (想像)



1593^P-5/5

④ 1732-2/2 ↔
④ 1546-3/4

我が国初代天皇の直系の子孫
天津彦根命は、特に尊敬
されていたのだから、
これら4氏族は、後代において、
大いに活躍したのだ。